

日本の名作名文ハイライト

# 藪の中

芥川龍之介

朗読 森下潤子

出所 朗読たんぽぽ くことばの綿毛を飛ばそうく

<http://www.voiceblog.jp/junkoropin/>

teabreak 編

# 藪の中 芥川龍之介

## ●前半部分

検非違使に問われたる木樵りの物語

さようでございます。あの死骸を見つけたのは、わたしに違いございません。わたしは今朝いつもの通り、裏山の杉を伐りに参りました。すると山陰の藪の中に、あの死骸があつたのでございます。あつた処でございますか？ それは山科の駅路からは、四五町ほど隔たつておりましょう。竹の中に痩せ杉の交つた、人気のない所でございます。

死骸は縹の水干に、都風のさび烏帽子をかぶつたまま、仰向けに倒れておりました。何しろ一刀とは申すものの、胸もとの突き傷でございますから、死骸のまわりの竹の落葉は、蘇芳に浸みたようでございます。いえ、血はもう流れてはおりません。傷口も乾いておつたようでございます。おまけにそこには、馬蠅が一匹、わたしの足音も聞えないように、べったり食いついておりましたっけ。

太刀か何かは見えなかつたか？ いえ、何もございません。ただその側の杉の根がたに、縄が一筋落ちておりました。それから、——そう、縄のほかにも櫛が一つございました。死骸のまわりにあつたものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏

み荒されておりましたから、きっとあの男は殺される前に、よほど手痛い働きでも致したのに違いございません。何、馬はいなかったか？ あそこは一体馬などには、はいれない所でございます。何しろ馬の通う路とは、藪一つ隔たっておりますから。

### 検非違使に問われたる旅法師の物語

あの死骸の男には、確かに昨日遇っております。昨日の、——さあ、午頃でございましょう。場所は関山から山科へ、参ろうという途中でございます。あの男は馬に乗った女と一しよに、関山の方へ歩いて参りました。女は傘子を垂れておりましたから、顔はわたしにはわかりません。見えたのはただ萩重ねらしい、衣の色ばかりでございます。馬は月毛の、——確か法師髪の馬のようでございます。だけでございますか？ だけは四寸もございましたか？ ——何しろ沙門の事でございますから、その辺ははつきり存じません。男は、——いえ、太刀も帯びて居れば、弓矢も携えておりました。ことに黒い塗り籠へ二十あまり征矢をさしたのは、ただ今でもはつきり覚えております。あの男がかようになろうとは、夢にも思わずにりましたが、真に人間の命などは、如露また如電に違いございません。やれやれ、何とも申しようのない、気の毒な事を致しました。

## 検非違使に問われたる放免の物語

わたしが搦め取った男でございますか？　これは確かに多襄丸という、名高い盗人でございます。もともとわたしが搦め取った時には、馬から落ちたのでございましょう、粟田口の石橋の上に、うんうん呻っております。時刻でございますか？　時刻は昨夜の初更頃でございます。いつぞやわたしが捉え損じた時にも、やはりこの紺の水干に、打出しの太刀を佩いておりました。ただ今はそのほかにも御覧の通り、弓矢の類さえ携えております。さようでございますか？　あの死骸の男が持っていたのも、——では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違いないと思いません。革を巻いた弓、黒塗りの箆、鷹の羽の征矢が十七本、——これは皆、あの男が持っていたものでございましょう。はい。馬もおっしゃる通り、法師髪の月毛でございます。その畜生に落されるとは、何かの因縁に違いないと思いません。それは石橋の少し先に、長い端綱を引いたまま、路ばたの青芒を食っております。

この多襄丸というやつは、洛中に徘徊する盗人の中でも、女好きのやつでございます。昨年秋、一鳥部寺の賓頭盧の後の山に、物詣でに来たらしい女房が一人、女の童と一しよに殺されていたのは、こいつの仕業だとか申しておりました。その月毛に乗っていた女も、こいつがあつた男を殺したとなれば、どこへどうしたかわかりません。差出が

ましゅうございますが、それも御詮議下さいまし。

### 検非違使に問われたる媼の物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片付いた男でございます。が、都のものではございません。若狭の国府の侍でございます。名は金沢の武広、年は二十六歳でございます。いえ、優しい気立でございますから、遺恨など受けるはずはございません。

娘でございますか？ 娘の名は真砂、年は十九歳でございます。これは男にも劣らぬくらい、勝気の子でございますが、まだ一度も武広のほかには、男を持った事はございません。顔は色の浅黒い、左の眼尻に黒子のある、小さい瓜実顔でございます。

武広は昨日娘と一しよに、若狭へ立ったのでございますが、こんな事になりますとは、何という因果でございましょう。しかし娘はどうなりましたやら、婿の事はあきらめましても、これだけは心配でなりません。どうかこの姥が一生のお願いでございしますから、たとい草木を分けましても、娘の行方をお尋ね下さいまし。何に致せ憎いのは、その多襄丸とか何とか申す、盗人のやつでございます。婿ばかりか、

娘までも……………

（跡は泣き入りて言葉なし）

## 多襄丸の白状

×

×

×

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。ではどこへ行ったのか？ それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問にかけられても、知らない事は申されません。い。その上わたしもこうなれば、卑怯な隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日の午少し過ぎ、あの夫婦に出会いました。その時風の吹いた拍子に、牟子の垂絹が上ったものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思う瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはそのためもあったのでしよう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩のように見えたのです。わたしはそのとつさの間に、たとい男は殺しても、女は奪おうと決心しました。

何、男を殺すなぞは、あなた方の思っているように、大した事ではありません。どうせ女を奪うとなれば、必ず、男は殺されるのです。ただわたしは殺す時に、腰の太刀を使うのですが、あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとおためごかしの言葉だけでも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派に生きている、——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりません。

皮肉なる微笑)

しかし男を殺さずとも、女を奪う事ができれば、別に不足はない訳です。いや、その時の心もちでは、できるだけ男を殺さずに、女を奪おうと決心したのです。が、あの山科の駅路では、とてもそんな事はできません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫をしました。

これも造作はありません。わたしはあの夫婦と途づれになると、向うの山には古塚がある、この古塚を発いて見たら、鏡や太刀が沢山出た、わたしは誰も知らないように、山の陰の藪の中へ、そういう物を埋めてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に売り渡したい、——という話をしたのです。男はいつかわたしの話に、だんだん心を動かし始めました。それから、——どうです。欲というものは恐しいではありませんか？ それから半時もたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路へ馬を向けていたのです。

わたしは藪の前へ来ると、宝はこの中に埋めてある、見に来てくれといいました。男は欲に渴いていますから、異存のあるはずはありません。が、女は馬も下りずに、待っているというのです。またあの藪の茂っているのを見ては、そういうのも無理はありますまい。わたしはこれも実をいえば、思う壺にはまったのですから、女一人を残したまま、男と藪の中へはいりました。